

# 東北タイの現状と農民の生活

広 正 義

Status of North East THAILAND and the Life of Farmers

by

Masayoshi HIRO

## 緒 言

1972年6月から12月までわれわれはタイ国衛生省の要請により、同省栄養部と共同で東北タイ、コンケン地方における農民の間に多く発生している貧血問題を究明するため、血液学、栄養学、調理、寄生虫およびこれらを取りまく環境などの面から調査を行なった。この結果については別の機会に報告するが、調査期間中2回にわたり現地におもむき、東北タイの現状を観察し、農民生活の中に入り具体的にその実態を調査したので今回はその概要について報告する。

## I 東北タイの地勢

東北タイは地勢的にみると、その入口にあたるコラートを扇のカナメとするならば、左の線がコラートとヴィエンチャンを結ぶ軸であり、右の線がコラートとウボンをつ結ぶ軸となる。したがって扇上の半円形に当る部分がメコンの流域である。このようにコラートからメコン河に向って扇形に広がる東北タイは海拔50~200mほどの丘陵に近い大平原であり、その扇形を取りまく山々はそれ程高くはないが、人々が日々交流するという点からみれば、それは大平原



東北タイ略図

と山の向う側との交流にはかなり大きな障害となっていた。

そしてメコン河だけが北と南でこの平原の他の世界に対する最大の交流ルートであった。

また東北タイを流れる川はムーン川をはじめ、大小多数の河川があるが、これらはすべてメコン河にそそいでおり、いずれもその支流となっている。この点からいえば東北タイ全域はすべてメコン河の流域といえる。

メコンの左岸と右岸に住む人々の間では言語、宗教、習慣など共通のものが多くみられるが、山岳地帯をへだてたメナムのデルタ地帯のものとはかなり異っている。すなわちメコン流域のものはいわゆるラオ風というものであろう。

## Ⅱ 東北タイの現状

### 1. 行政区画と経済開発

タイ国の経済開発は1960年から着々と進み、第1次(1961~1966年)、第2次(1966~1971年)開発計画を通じ一応の成果をあげられたものと評価されている。

しかし政府が目標としてかかげた地域差の是正については、必ずしも目標に達したわけではなく、それは1971年10月からはじまった第3次開発計画に引継がれている。タイ政府としては東北タイは開発の最もおくれた地区で、とくに地域格差の是正について力を入れなければならない地域である。タイ国は行政的に71県に分かれ、各県は内務省の管轄になっている。このうち東北タイは15県からなっていて、人口、面積はいずれもタイ全体の $\frac{1}{3}$ を占めている。

タイ政府としてはさきにもふれた如く、ラオス、カンボジャなどと国境を接し、北ベトナムにも距離的に近い。しかも地理的条件や貧困からくる政治不安をなくしておかなければならない政治上重要な地域である。

1966年以来ベトナム戦争のためアメリカの軍用基地が東北タイ各地に建設され、これに伴ない道路も新設され、バンコックとの流通機構の拡充などにより経済レベルもかなり上昇してきたことは確かである。このことはタイ国にとって戦争がもたらしたいろいろな功罪のなかで少くとも10年はかかったであろう山岳地帯の開発を極めて短期間に行なった点では大きな寄与といえよう。

### 2. 人口、面積、住民

(1) タイの人口は1970年4月の国勢調査では34,152,000人でこのうち東北タイは12,023,000人である。これはタイ国全人口の $\frac{1}{3}$ にあたる。

各県庁の所在地は人口おおむね1~5万位の町であり、その中心街には多くの場合中国人商店が軒をつらねている。このうちでも米軍基地のあるウボン、ウドン、ユラート、ナコンパノムは東北タイを代表する都市として知られ、人口も5万をこえている。

われわれが調査の対象としたコンケン県(Khon Kaen)は人口1,025,000人(168,000世帯)面積は13,404km<sup>2</sup>であり、その県庁の所在地コンケンには政府が東北タイ開発計画上モデル都市とする構想をもっている町である。かつては米を主体とした農産物や畜産物の取引を中心とした比較的小さな町であった。しかし今日ではそれは大きく変ぼうしつつある。

街には県庁をはじめ警察その他官庁、病院、銀行が立ちならび、立派な店もふえ、東北タイ内陸部への交通の要地として、またレコード、ラジオ、オートバイなど新消費財の取引で活気のある町となっている。

面積についてみると東北タイは、タイ国全土の33.1%に当る170,226km<sup>2</sup>であるが、土地の利用度は低く未開拓地が多い。

(2) 東北タイの住民はラオス人が最も多く、その主体をなしている。この他中国人、プータイ族、クメール族、ベトナム人およびカア (Kha) と呼ばれるマレー系の民族など人種構成は多種多様である。そして町には中国人、ベトナム人が多い。これらの人達は殆んど言語的にはラオ語を話している。もともとラオ族とタイ族とは同系の人種でラオ語とタイ語の差は関東弁と関西弁の違いを少し大げさにした程度のものだといわれているが、中には全く異った言葉もあるらしい。

またこの地域は地理的に北ベトナムとも極めて近く、ナコンパノムはさきに述べた扇の円形の線の中ほどにあたる場所であるが、北ベトナムの国境まで100kmあまり、トンキン湾まで約150kmの距離にある。このような関係からか、東北タイにはベトナム人もかなり多く住んでいる。例えばメコン河の右岸にあるノンカイ、ナコンパノムをはじめ各地には数万人のベトナム人が住み、その中の多くは北ベトナム人である。

これらの人々は第2次世界大戦中、日本軍の進駐により、またその後アメリカとの戦いなどの余波を受けて流れこんできたものが多いようである。しかし中には古くからこの地に長く住みついている人も少なくない。

ナコンパノムの対岸のラオス側にタケクという町がある。このタケクという言葉は、「お客さんの渡り場」という意味だそうで、ベトナム人渡来の歴史の浅くないことを物語っている。

### 3. 交 通

#### (1) 道 路

東北地方はかつては(1960年代の前半まで)道路の開発のおくれていた地域であった。しかし最近バンコックからコラート、コンケン、ウドンを経て国境の町ノンカイに至る650kmのフレンドシップハイウェイが完成し、さらにコンケン、ロイエット、ウドンを結ぶハイウェイも開発された。これらは本来米軍の軍事物資の輸送目的のため建設されたものであるが、今日では産業道路として重要な役割を果たしている。そして雨期、乾期にかかわらず商品、資材の輸送を可能にし、東北タイ経済の発展に大きく貢献している。

#### (2) 鉄 道

バンコックから東北タイへのびている鉄道を東北線と呼び、その一つはコラートを経てウボンへ、他の一つはノンカイへのびている。

このうちの一部は電化されているが、大部分は旧式のもので時速50~80km程度である。日本に比べると20年ほどおくといい。主な輸送物資は木材、石材、石油などである。しかしこれらは道路の発達に伴ないトラック輸送に変わりつつある。

#### (3) 航 空

国内航空は Thai Air Way が1日1往復(DC 3型が中心)、バンコックーコンケンーウドンーノンカイの650kmを約1時間30分で飛んでいるが将来航空網の開発が期待される。

## Ⅲ 農業と農民の生活

### 1. 農 業

東北タイの人口12,023,000人のうち農業従事者は950万といわれ、その就農率は(1970年4月国勢調査) タイ国では最も高い。これらの人々による生産高は1968年で5,452百万パーツ

(1 パーツ15円)と推算されている。すなわち1人当りの生産額は 574パーツ (8,610円)であって極めて低水準である。

しかしチーク材、ヤーン材などをはじめとする各種の林産物は年額 614百万パーツとなり、これらを含めると農林業部門としての生産額は 6,066百万パーツとなって、やや上昇〔1人当り 634パーツ (9,510円)〕するが、いずれにしても1人当りの農民所得は極めて低い。1963年 国家統計局の調査によると、地域別農家の所得格差は、中部タイを100とすれば北部タイは53、南部タイ51、東北タイは45となっている。またこの地方の主な農産物はコンケン農業総合センターの報告によると下表に示したように、米、ケナフ、ジュート、ニンニク、タマネギ、トウガラシ、タバコ、綿花、落花生、砂糖ギビ、タピオカ、カポック、ココナツ、大豆などである。このうち米が60.8%で、全国の32%を占めており、しかももち米が最も多い。

米につぐ農産物はケナフ、ジュートであるが、専門家の話によると、この地方ではジュートというものはあまりなく、彼等が、ジュートとっているものの大部分はケナフである。農民はこの両者を区別せずどちらもジュートと呼んでいる場合が多い。

これの生産額は全農業生産額の10.5%占めていて、これらは地元のジュート工場で麻袋や麻糸に加工され、タイ国の輸出品として海外に販売される。

東北タイの農村地帯を汽車や自動車で見ると見渡す限りの田んぼとその間に散在するケナフ、ジュート畑とバナナ畑がみられる程度で極めて単調な風景がどこまでも続いている。このことによっても米とケナフ、ジュートがこの地方の主なる農産物であることが一目してわかる。

今回の調査期間中、大学教授、県の役人、農民などからしばしば耳にしたことは、東北タイが現在かかえている最大の課題は灌漑問題である。現在この地方には大小合せて150~200にのぼる貯水池があり、これらの中にはアメリカの援助によってできた大型貯水池もかなり多い。しかしそれらは実際に灌漑用水

東北タイの農業生産

(1962年価格) (単位百万パーツ)

区 分	66年	67年	68年
米	3,586.2 (55.2)	2,449.6 (51.4)	3,317.0 (60.8)
ケナフ・ジュート	1,481.2 (22.8)	863.2 (18.1)	570.9 (10.5)
ニンニク・玉ネギ トウガラシ	181.4 (2.8)	172.2 (3.6)	180.1 (5.5)
タ バ コ	122.1 (1.9)	127.9 (2.7)	129.2 (2.4)
綿 花	49.6 (0.8)	60.0 (1.3)	72.1 (1.3)
落 花 生	73.4 (1.1)	69.1 (1.4)	68.6 (1.3)
砂 糖 キ ビ	49.8 (0.8)	46.5 (1.0)	54.0 (1.0)
タ ピ オ カ	28.5 (0.4)	35.4 (0.7)	47.2 (0.9)
カ ポ ッ ク	61.6 (0.9)	52.1 (1.1)	55.4 (1.0)
コ コ ナ ッ ツ	44.6 (0.7)	42.6 (0.9)	43.8 (0.8)
大 豆	1.6 (0.0)	0.9 (0.0)	0.7 (0.0)
野 菜	111.8 (1.7)	120.8 (2.5)	131.9 (20)
果 物	585.1 (9.0)	611.4 (12.8)	646.0 (11.9)
その他共計(A)	6,499.1 (100.0)	4,767.9 (100.0)	5,451.8 (100.0)
伸び率 (対前年)	31.7	26.7	14.5
全国計総 (B)	23,341.4	20,686.1	21,892.2
A/B	27.8	23.8	24.1

として利用されているものは極めて少ない。それは水利施設が不備であることによるもので、このことが、解決出来たならば東北タイの農業は著しい進歩がみられるということである。

## 2. 農民の生活

東北タイの農民が一般に貧しいのは土地がやせていること、例えばカラシン、マハサラカム、ロイエットなどのように雨期の雨が不安定でしばしば大乾ばつに見舞われるなど、めぐまれない自然条件もさることながらもう一つ、政治の手がゆき届いていないことである。

この地方では耕地の90%以上が米作地で何がなくとも米さえあればという伝統的な信念の他に、貯蔵がきくためある程度中間商人に対して対等で取引が出来るという米の特性がこの地方の農民を米、一辺倒にしているもののようである。

東北タイでは一戸当りの耕地はいくら、反当りの収量はどれだけかという正確な統計は出来ていない。もしあったとしてもそれは信用が出来ないそうである。森林に適当に土を盛って四方を囲み雨水を逃さないようにさえすればそこは立派な水田となり、稲が育つわけで、政府が開墾を禁止している区域でも畑や水田になっているところがかなりあると聞く。

また役人も車の通らないところへ危険をおかしてまでも立入って調査はしないし、税金をとられるために、わざわざ登記をする農民もいないわけで、さらに畑ともなればなおさらのことである。

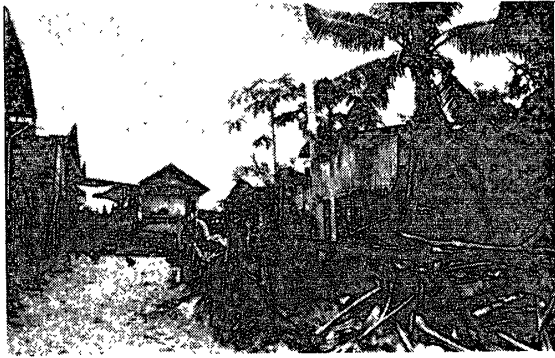
このように禁止区域も役人が気がついたときにはいつの間にかケナフ畑になっていることもしばしばみられるという。

すでに述べたごとく我々の目に映じたコンケンやウドンなど東北の都市ではホテル、レストランをはじめ新しい建物が立ち並び、夜にはネオンが輝き商店やマーケットには商品の山、行き交うバスは屋根の上までかごに入ったニワトリやブタ、市場に出す野菜が満載されている。しかし一歩街を出て農村に入れば全く別の世界であることに気付く。そこではアヒルもブタも野菜も金に換えられるものはすべて売り、自分達は米とわずかに得られる野草や木の実、淡水動物などで糊口をしのいでいる貧しい農民の姿があまりにも多い。

彼等の主たる蛋白源は淡水動物で、食べられるものは何でも食用にする。それらは各所に無数にある湖沼や河川から得られるが、そこでは高い気温と熱帯特有の湖沼の特性から魚、貝類やエビなどの成育は早く、その生産力はかなり高い。そのうえ漁業権などといったむづかしい問題はないから取り放題である。その他雨期には水田の中でもフナやアカハラ、グラデイなどが捕えられ、多くは自家で消費される。しかし貧しいものはそれをも町の市場へもってゆき、大切な現金収入の資源としている。

この地方では雨期は5月から10月までで、雨期のはじめから翌年の1月くらいまでは、緑につつまれた美しい田園風景が各地にみられる。しかし乾期の末期である3月、4月ともなると風景は一変する。乾ききった土地、今にも枯れそうな木々、湖水や河川には水がなくなり、荒れた原野に黄色い土が舞い、40°Cを越す暑さのつづく日もある。そして住民の飲料水すらなくなっていく。このような状態の中で農民は生きてゆかなければならない。その厳しさはメナムのデルタ地帯の人々にはとても想像できないことである。農民の部落は今日でも電灯はなく、徹底した早寝早起き主義で、油代の節約もさることながら、昔から妖怪と泥棒の伝説が伝わっていて暗くなれば一刻も早く戸をしめて寝てしまう習慣がある。

つぎに食糧についてのべると、主食はもち米であり、蛋白源は川魚の他、タニシ、カエル、カニ、アリ、ハチの仔、コオロギ、ケラ、タイコウチなど食べられるものは何でも手あたり



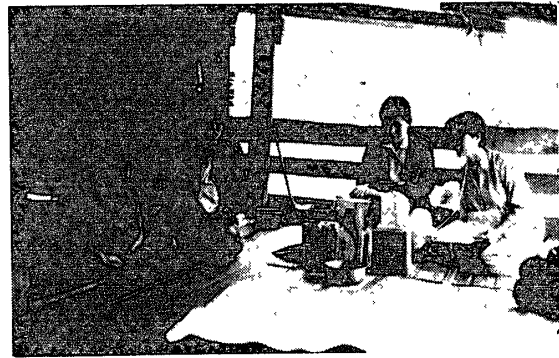
農民の部落



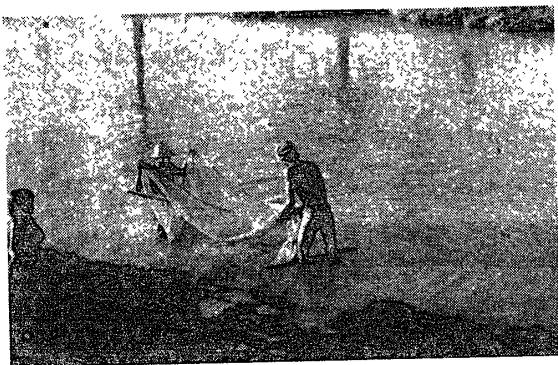
農民の水くみ



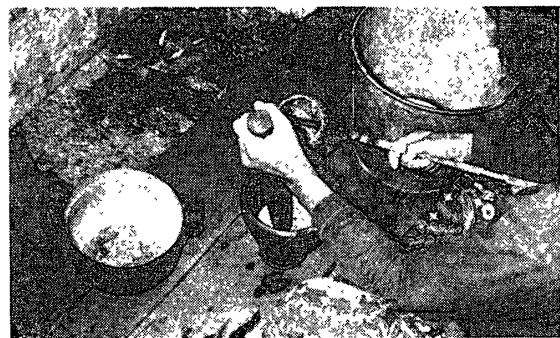
ジュートの洗浄



食品摂取量の調査



農民の魚とり



水生昆虫の調理

次第食べる。なかでも臭気の強いタイコウチは農民の大好物である。乾期が終り雨期がはじまる頃になると投網や四つ手網などをもち出し、水溜りに集る農民の姿が目立つ。

また村には猟銃をもっているものも多いが、広い森林があっても、そこには食用になるような小鳥はあまりみられない。これは長い間にとりつくしてしまったことによるものらしい。野菜類としては木の芽、野草、アカシヤの実、ハス、水草、唐辛子、長豆、ナスなどあるが、何れも火を通さずにナムブリック（唐辛子醤油）や塩魚などにつけてたべるのが東北風というものだそうである。

家庭の中で目立つのは子供の多いことである。話によれば17～18才から産みはじめ47～48才まで産みつづけるという現実からみれば、栄養も悪く死亡率も高いことは容易に想像できる。また男の子は概して甘やかされて育てられ易いが、女の子は厳しくしつけられ容赦なく働かされる。学校へも中々ゆけなく小学校4年（7年制度）までゆけばその子は村では結構よい顔ができるということである。

農村の主な娯楽といえば飲むことと、打つことであるらしいが、もち米が常食であるこの地方ではドブクを作るにはたいしてぞうさはかからない。打つことは東北地方では老若男女を問わず一種の民族娯楽になっていて、道具もサイコロ、トランプ、花札、その他多種多様で、かけごとの好きな点もこの地方の農民の一つの特色である。

またこの土地の住民の性格は温和で、極めて楽天的である。その上信仰が深く、表だって争いをするのは極端にきらう。大きな声を出したり、せかせかと忙しく歩くのは教養が低いものとして軽視される。

以上おおまかに東北タイの現状と農民生活の概要を述べたが、この地方は今や急速なテンポで変わりつつある。しかもそれはアンバランスな形で、そしてこの10年が、過去の100年にあたるかも知れないようなスピードで平和な農村もその周囲から大きく変わっていくことが注目される。

## 参 考 文 献

- 1) ピア、アヌマーンラーチャトン（阿部利夫訳）（1967）タイ農民の生活 東京外語大学アジア、アフリカ文化研究所
- 2) 駒井 洋（1970）タイの近代化 日本国際問題研究所
- 3) バイトゥーン、クルアケオ（吉川利治訳）（1970）タイ社会の特質 バンコック日本人商工会議所
- 4) UP COUNTRY 紹介（1972）バンコック日本人商工会議所